

# From福島



## 地域の伝統を未来へつなぐ 相馬野馬追

7月末、甲冑姿の騎馬武者たちが戦国絵巻を繰り広げる、相馬野馬追。千年以上継承されると伝えられるこの伝統の祭りは、大震災と原発事故の惨禍にも中断することなく、今も華やかに勇壮に執り行われている。安寧と繁栄を祈る、人々の熱い思いをのせて――。

上左／2日目の「甲冑競馬」。旗印を背にした騎馬武者が、1kmを疾走  
上右／「お行列」では、三神社の御神輿と各郷の騎馬武者たちが町を行く



各神社から出立する初日の「お繰り出し」。出陣式ののち祭場地へ向かう



「神旗争奪戦」。花火で打ち上げた神旗を地面に落ちる前に鞭でからめて取る

### 旧相馬中村藩全域にわたる 馬と人と神の祭典

民家や店舗が軒を連ねるアスファルトの道を、鎧兜に身を固め、色とりどりの旗印を背負った騎馬武者が列をなして進んでいく。その数、実に500騎近く。3kmの行軍で目指すのは祭場地である雲雀ヶ原（南相馬市原町区）。太鼓や螺（法螺貝）の音が響き、武者たちが述べる口上は、すべて武者言葉だ。相馬藩主を総大将とする行列ゆえ、見下ろしたり横切ったりしてはいけない。知らずに道を渡った観光客にも容赦なく、「何をしておる！横切るとはまかりならんっ！」と叱声が飛ぶ。

この「お行列」と呼ばれる行事は、3日間に渡る野馬追のうち、2日目の午前中に行われるもの。野馬追の行事は旧領内の3つの神社から出陣する「お繰り出し」に始まり、「宵乗り競馬」やこの「お

行列」、「甲冑競馬」、神旗を数百の騎馬武者が取り合う「神旗争奪戦」など多岐にわたる。最終日に放した馬を素手で捕えて神に奉納する「野馬懸」は古式をそのままに留める行事で、「相馬野馬追が国指定重要無形民俗文化財に指定された大きな要因となったそうです」と執行委員会事務局（南相馬市観光交流課）石川博之さんはいう。

相馬野馬追は、伝承では千年以上もの昔、相馬氏の遠祖とされる平将門が下総国小金ヶ原（千葉）で野馬を敵兵に見立てて軍事訓練をしたことに始まるといわれる。捕らえた馬を氏神である妙見に奉納する神事でもあった野馬追は、14世紀に相馬氏がこの地に移ってから継承されてきた。現在では旧相馬中村藩領の区割（郷）にちなみ、宇多郷、北郷、中ノ郷、小高郷、標葉郷それぞれの騎馬武者たちが3神社の御神輿を奉じて野馬追に参加している。

### 鎮魂と復興の祈りをこめた 2011年「相馬三社野馬追」

近年最大で20万人近くの来場者を集めてきた、相馬野馬追。しかし相馬地方は、2011年、大震災による津波とその後におきた原発事故によって未曾有の被害をこうむり、多くの住民が避難生活を強いられる事態となった。もちろん野



馬追の関係者やその家族、そして馬たちにも多大な犠牲が出ている。

震災から7月23～25日に予定されていた野馬追までは約4カ月。実施は無理と危ぶまれたが、規模を大幅に縮小してこの年も野馬追は行われた。甲冑競馬や神旗争奪戦は取りやめ、騎馬での参加は宇多郷と北郷のみ82騎。他郷では神社での行事だけを執り行った。「こんな時に」「野馬追どころじゃない」という声もあったが、「東日本大震災復興相馬三社野馬追」として実施を決めた。根底には、「犠牲者への鎮魂と地域の復興への思いがありました」という。

翌年には雲雀ヶ原祭場地の緊急時避難準備地区指定が解除となり、全国の牧場や乗馬クラブなどの支援で避難していた馬も帰郷。お行列や甲冑競馬、神旗争奪戦も復活してほぼ例年通りの開催となった。来場者は前年の3万7千人から16万人近くへ回復し、震災以前の水準に戻っている。いまだ多くが帰宅困難地域の標葉郷をはじめとする地区では、避難先から参加する状況は続いているが、野馬追が避難者と故郷を結ぶよりどころになっている。また、小高区では2016年7月の避難指示解除で3割程度ではあるが住民が帰還したことから、2017年、地元での騎馬行列が7年ぶりに再開された。

野馬追はこれまでも、大きな危機を乗り越えてきた歴史をもつ。明治維新では行事の主体だった藩が解体され、追うべき野馬（放牧されていた藩有の馬）がいなくなったが、神社の行事として野馬追は生き残った。神旗争奪戦はこの頃に始まっている。終戦直後は占領軍に配慮し、鎧兜や刀は着けず「武」の要素を極力薄くし、スポーツ色を強めて存続をはかったという。

### 危機や課題を乗り越えて さらなる継承と発展を

時代の変化や危機に直面しても形を変えながら守り伝えられてきた野馬追は、地域の中で、どんな人々によってどのように担われているのだろうか。

「震災の年の野馬追は、1080回続いて

きたものを、途絶えさせるわけにはいかないという思いでした」。そう振り返る佐藤徳さんは、24歳の時から40年以上、出陣を続けている。本家が野馬追に参加し、親の知人が競走馬を育てていたため馬と接する機会も多く、野馬追は少年時代からの憧れだったという。

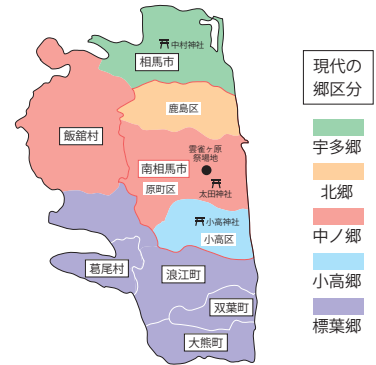
相馬野馬追は総大将を頂点に十数もの役職で構成されている。佐藤さんは中ノ郷騎馬会で順次階層を上がり、8年間幹部役の軍者を務めた。勤めの一方で馬を飼うようになり、自力で厩舎と馬場も整備。仕事をリタイアした今は自分の馬を4頭、人から預かった5頭を飼っている。ちなみに野馬追に出る500頭近くの馬のうち、佐藤さんのような地元厩舎預けの馬も含めて現在4割ほどが自己所有。あとは野馬追が近づくと他所から借りてくるのだそうだ。

江戸時代の具足が多いという高価な鎧兜や馬装も整えなければならず、かかる費用はかなりのものだ。野馬追への参加は世襲でも義務でもなく、自由意志。それだけに家族や周囲の応援とサポートは欠かせない。

「なぜ野馬追を続けてきたのか…、好きだからとしかいいようがない。馬も馬に乗ることも大好きだからね。今も野馬追あつての毎日であり、人生です」と佐藤さんはいう。

震災と事故の痛手を今も抱えながら、復活を遂げた相馬野馬追。もちろん問題や課題もある。騎馬武者中心の祭りであるがゆえに、町に馬と人が集結するのを冷ややかに見る住民もいれば、住民が戻れない、戻らない地域では後継者問題も深刻だ。石川さんによれば、観光面では元々地域に宿泊施設が少なく、祭りの一部を見るだけの「通過型」観光から脱却できないことも問題だという。

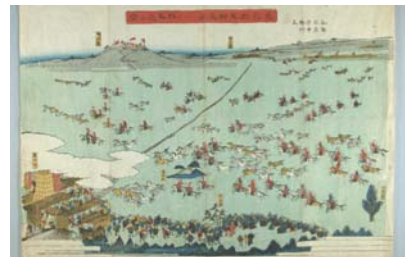
とはいえ野馬追はやはり相馬の誇りであり、古くから馬事文化が根付いてきた地域と不可分の存在だ。夏が兆してくれば祭りは近い。1カ月を切る頃には騎馬武者たちはみな髭を生やし始め、早朝の町に野馬追の足ならしに向かう蹄の音が響くようになる。今年の夏もまた、野馬追に託す人々の思いは熱い。



現在もかつての相馬藩の行政区だった郷に準拠して、野馬追は運営されている



最終日に小高神社で行われる「野馬懸」。素手で馬を捕らえ、神に奉納する



かつての野馬追の様子。『奥州相馬妙見祭其二 野馬追之図』江戸時代後期（詳細な時期は不明）南相馬市博物館所蔵



野馬懸が行われる小高神社。中世の相馬氏居城跡にあり、土塁など城の面影が残る



2日目の行事を終え、のんびり帰途につく人馬。後ろ姿に満足感と安堵感がにじむ

取材・写真協力/相馬野馬追執行委員会事務局(南相馬市観光交流課)・南相馬市博物館